

## そのころ、カフェで始まる別のはなし

「やった」

「やってない」

「あれはやってる」

ガラス越しに街ゆく人々を眺めながら、体の関係の有無を当て合うという  
なんともくだらないゲームをして時間を潰す私たち。

もうすぐクリスマスだっていうのに、彼氏が居なくてクサクサする。  
という友達を遊びに誘ってみたけど、機嫌は相変わらず悪いみたい。

「前言ってた、酒屋の人どうなの」

「ああ、配達の？彼女いたみたい。ガッカリ。」

煙草をふーっと吐いて、イルミネーションを睨みつける。

「もうこのまま相手が居なかったらどうしよう」

「まあすんなり結婚も出来ないしね、私たち」

「もうヤダ！呪ってやる！どうせあいつも、あいつもやってるんでしょ！」

あのカップルなんて、いかにも今からって感じで歩いてる。

手がくつつくか、くつつかないかの距離。

あー初々しい。

友達は、ん、と煙草をもみ消す。

「でも私たちだってカップルに見えてるかも。やってる！って思われてるかもねー」

思わずボツと赤くなる。

「そ、そうよねー、そう思えば、この人たちもカップルってわけでもないのかもー…」

まあ私はずっとカップルになりたいと思ってたけど。

言えば友情が壊れそうで、ずっと言えないまま。

「そろそろ店戻ろうか？ママ怒ってるかも」

「そうだね。トレー返してくるよ」

ドトールを出ると冷たい風がびゅうと吹いた。

友達の手をつないでくれる。

期待していいのかなー、

こういうプレイボーイっぽいところ、好き。

「寒いね」「うん」

でも遊ばれるのは好きじゃない。  
口数少なく、私たちは2丁目の角を曲がった。